

大阪公立大学

大学教育だより



ロゴデザイン:吉谷ひかり

RDHE 2023.3 No.1

Center for Research and Development in Higher Education

本冊子および前身の冊子は下記のURL・QRコードで読みます

<https://www.omy.ac.jp/las/highedu/publication/rdhe/index.html>

大阪公立大学高等教育研究開発センター

杉本キャンパス 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 (杉本キャンパス全学共通教育棟5F)

中百舌鳥キャンパス 〒559-8531 堺市中区学園町1番1号 (中百舌鳥キャンパスB3棟215)



T N O C

E
N
T
S
大学教育だより No.1

創刊特集記事

Voice ~学生の声

学生による大阪公立大学学長インタビュー 1—3

商学部と農学部の学生交流と座談会 3—5



Campus Inquiry

ウチの学部学域・研究科・機構ではこんな教育を行っています! 6—9

現代システム科学域・研究科／商学部・経営学研究科／
獣医学部・研究科／国際基幹教育機構



OMU Education &
FD News

OMUラーニングセンター(教育学修支援室学修支援部門)の
支援内容や自主学修教材の紹介 10

高等教育研究開発センターが実施する全学FDの推進・支援の紹介 10

アン ロゾ (Un roseau) No.1 : 縦書き部分

- 谷口 栄一 先生 (国際基幹教育機構)
- 谷口 与史也 先生 (工学研究科・高度人材育成推進センター)

創刊特集記事 学生による大阪公立大学学長インタビュー

2022年4月に大阪市立大学と大阪府立大学が統合し、新たに大阪公立大学が誕生しました。その初代学長に就任した辰巳砂昌弘学長は、両大学の約140年の歴史と伝統を守りつつ、大学統合をさらなる発展の機会と捉え、「高度研究型大学」と「地域に根差した都市型大学」を両立する大学を目指しています。工学（無機材料化学、固体イオニクス、ガラス科学）における、持続可能な社会に寄与する次世代電池である全固体電池の研究分野の第一線の研究者でもあります。大きな変化が起きるときに進歩があると語る辰巳砂学長に、学生の立場から、大阪公立大学の強みや特色、今後の方向性、学生に期待することを聞きました。

大阪公立大学の強みや特色

—まずは、大学統合のことについてお尋ねしたいと思います。大阪市立大学と大阪府立大学が統合したこと、どのような強みや特色を持つ大学になったのでしょうか。

大阪市立大学と大阪府立大学は、ともに約140年の歴史を誇る大学で、それぞれ異なる文化を形成してきました。そのような歴史や文化の違いこそが大阪公立大学の強みになると見えています。人間にも同じことが言えると思いますが、大きな変化が生じるときに、大きな進歩もあると思っています。

特色に関しては、大阪市立大学、大阪府立大学ともに幅広い学問分野を持つ総合大学でしたが、両大学の統合によって、大阪公立大学という一つの大学にさらに幅広く相補的な学問分野が揃うことになります。12学部・学域、15研究科というフルラインナップの総合大学になるというのが一番のポイント



大阪公立大学学長

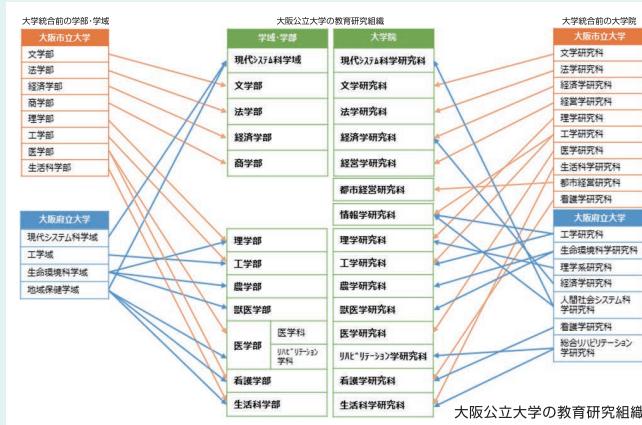
辰巳砂 昌弘 (たつみさご まさひろ)

1955年生まれ。大阪大学工学部応用化学科卒業、大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻博士前期課程修了。工学博士(大阪大学)。1980年大阪府立大学工学部助手、同講師、助教授、教授。2015年大阪府立大学大学院工学研究科研究科長。2019年大阪府立大学学長兼公立大学法人大阪副理事長。2022年4月1日より現職。

です。複雑な社会が抱える課題に対して、特定の分野の知識だけで解決しようとしても多くの場合、うまくいきません。個々の「専門知」を深めつつ、他分野の知と組み合わせながら「総合知」で課題の解決に挑むことが重要なと考えています。研究においても、基礎から応用までを備えた拠点になりますし、例えば医学、リハビリテーション学、看護学、生活科学、理工学などが横断的に連携して予防医療研究を推進するなど、これまでにない研究成果が期待できます。

また、大学の規模が大きくなったというのも大阪公立大学の特徴です。学部生の入学定員で見ると約2,850名で、公立大学で全国一、国公立大学で3番目の規模です。学部生と大学院生を合わせた学生数だと、1万6,000名規模の大学になりました。少子高齢化が進み、大学間競争が激しくなる中、国内だけでなく海外に対してもスケールメリットを高めるというのは意義があります。

一大阪公立大学の強みや特色として、文系、理系が融合して新しい研究が進み、総合的に社会の課題を解決できるようになるということで、大変よくわかりました。そのような大阪公立大学で学ぶ学生としては、他分野の先生の授業を受けたり、他分野の学生と一緒に学んだりする機会について知りたいです。具体的にはどのようなものがあるのでしょうか。



1年生の皆さんには「初年次セミナー」という必修科目があります。今日、インターに来られている皆さんはよくご存じのように、セミナーというのは少人数の学生が教員を囲んで、特定のテーマについてグループで討論を重ねながら研究していく授業のことです。授業を担当するのは全学部・学域の教員で、約200のテーマの授業が開講されます。例えば、文学部の学生さんが医学部の教員のゼミナールに入ったり、経済学部の教員のゼミナールを選んだりすることが可能です。いろいろな学問的関心や価値観を持った人たちが集まって、一緒に学ぶ経験を1年生のときからすることができます。

また、総合大学の強みをより一層強くするために、学部・学域の垣根を低くしていくといたいと考えています。今、お話しした1年生向けの「初年次セミナー」のような授業を3年生向けにも開講することなども検討していますし、他の学部・学域の学生がどのようなことを学んでいるのかを知る機会を増やしたり、転学部・転学科がしやすい制度に変えたりしていくべきだと思っています。また、大学院では、自分の研究分野と全く違う分野の研究室に3か月間所属して、新たな視点や手法を学んだり、異分野の教員・学生とのつながりを作ったりする研究室ローテーションを既に行っています。

文系・理系の融合による社会の課題解決

—「初年次ゼミナール」に関して、私は大学統合前の大阪市立大学で同様の授業（「初年次セミナー」）を受けていました、辰巳砂先生のお話にあつたように、自分とは違う学部の学生と話す機会がたくさんありました。各自が関心のあるテーマについてお互いに討論をして、とても刺激を受けましたし、研究の第一歩を踏み出した感じがしました。私は文学部ということもあり、とくに理系の学生と議論をするときには物事の捉え方が違うなと思うことが多く、気づきがたくさんあって新鮮でした。社会の課題解決に向かって文系と理系の融合に関して、総合大学の大坂公立大学としてどのようなことを考えているかを教えていただけるでしょうか。辰巳砂先生は理系の工学が専門ということで、理系の観点からのお話も伺ってみたいと思います。

初年次科目で文系と理系の学生さんがお互いにどのように学ばれているかを紹介いただいているありがとうございます。社会の課題解決のために文系と理系がどのように融合するかについては、「Well-being」の観点が重要で、人々が幸せになるために何をすべきか、幅広い専門分野の人々が知恵を出し合うことが大切だと考えています。

理系の観点からということで言えば、課題を解決しようというときに技術を磨くことが役立つ場面はもちろんなのですが、理系では技術 자체が先行し過ぎてしまうことがあります。今日インターに来られている皆さんのが所属されている文学部や文学研究科、法学部といった文系の学問分野の方々と対話をして、人々の幸せをどのように考えるのか、今しようとしていることは本当に人々の幸せのためになるのかを考えることが必要だと思います。

そのためにも、自分の所属している学部・学域とは違うところで他の人はどのようなことを学んでいるのか、いろいろな学問分野や価値観があることをお互いに知る機会を今以上に増やしていくと考えています。



森之宮キャンパスの開設

—新キャンパスについてお尋ねします。2025年に森之宮キャンパスが開設される予定となっています。どのようなキャンパスを計画していく、

学生はそこでどのように学ぶことになるのでしょうか。

一番大きな特徴は、全ての学部・学域の1年生がともに、また最初に学ぶキャンパスだということです。さまざまな学問分野に関心を持った学生が学部・学域の垣根を越えて学び合い、教養、専門的能力、情報収集・分析力、行動力、想像力、自己表現力といった力を身につけるとともに、お互いに切磋琢磨する仲間を作ったり、かけがえのない友人と出会ったりする場となります。

また、大阪のまちづくりにおいて、森之宮キャンパスの予定地が含まれる大阪城東部地区は重要なエリアとして位置づけられていて、大阪公立大学の新キャンパス整備はエリア開発の核となることが期待されています。大阪城東部地区のまちづくりは大阪府、大阪市、大阪メトロ、都市再生機構（UR都市機構）、JR西日本などの皆さんと一緒にやって進めていきますが、学生の皆さんもまちづくりの一翼を担うことになります。これから長い年月をかけて、まちが発展していきます。学生の皆さんはそこに関わることで、仲間とともに学び、これから社会で必要となる力を身につけるだけでなく、社会の人々と一緒にまちをつくるという貴重な体験もすることができます。

私が大学生だった頃の話ですが、通っていた大学があつた地域の大半は最初何もないところでした。それが大学の拡充に伴って周辺が活気づいてきて、地域は「大学のまち」として発展してきました。その当時、私もまちの一部になったという感じがあり、今でも誇らしく思っています。学生の皆さんにも、森之宮キャンパスでの学びの中でそのような経験をしてほしいと思っています。



学生の多様性をチャンスに

—森之宮キャンパスの計画をお聞きして、私もすぐ楽しみになりました。私は今4年生なのでキャンパスが完成した頃には卒業していますが、卒業後に新キャンパスを見てみたいなと思いました。

キャンパスのことを含め、今日は大阪公立大学のことを中心にお話を伺っていますが、私からは大学統合後も在籍している大阪市立大学、大阪府立大学の学生のことをお尋ねしたいと思います。大学では大阪公立大学の華やかな未来がたくさん語られる中、大阪市立大学、大阪府立大学の学生は、もしかすると自分たちは置いてけぼりになっているのではと感じることがあるかもしれません。大学として、大阪市立大学、大阪府立大学の学生をどのように考えていらっしゃるのかお伺いできればと思います。

大変率直にお話しいただいてありがとうございます。まず大学の仕組みとしての話をすると、大阪市立大学、大阪府立大学に入学された学生さんは、大阪市立大学、大阪府立大学の学生として卒業されることになります。それぞれの大学で掲げている教育目標を皆さん達成できるよう、大学としてすべきことはこれまでと変わりません。ただ、そうは言っても新大学となり大学として新しいことに力を注ぐ場面が多いので、ご質問いただいたように、市大生、府大生で寂しく感じられている方がおられるというのも仰る通りだと思います。皆さんがそのような思いをされることがないよう、寄り添っていきたいと思います。

今は大学統合の直後なので、大阪公立大学、大阪市立大学、大阪府立大学の3つの大学の学生が在籍しています。皆さんは大きな変化が起っている中で学んでいることになります。学内のさまざまなイベントや大学祭などを全学的に行っていますし、大阪市立大学と大阪府立大学の同窓会も新たに大阪公立大学校友会として一緒に交流しています。多様性が尊重される時代において、私は、学生の皆さんには多様性が身近にあるこの状況をプラスに捉えて、大きなチャンスにしてほしいと思っています。



大阪公立大学と中高の連携

—私は中学校、高校の教員を目指しているということもあり、大学と中高の連携のことをお尋ねしたいと思います。中高で探求学習が盛んに行われ、中高生が地域に目を向けることが増えてきていると思います。先ほど、森之宮地域の発展と大阪公立大学の関係をお話しいただきましたが、大阪公立大学と中高の連携についてどのようなことを考えられているでしょうか。また、中高生に向けて何か発信をしていくのでしょうか。

中学校、高校との連携はとても重要だと考えています。総合大学である大阪公立大学との連携は、中高生の皆さんにとって大変刺激的なものになると思っていますし、実際に中高の皆さんと連携事業を行っていて、中高生に大学に来ていただいて大学の学びを体験してもらったり、大学から出張講義や公開講座を提供したりしています。連携協定を結んでいる学校もあります。大阪公立大学では大学でのような教育・研究が行われているのか地域の皆さんに知ってもらう機会を広げていきたいと考えていて、そういう連携の

取り組みを通して地域の皆さんとの信頼関係を築いていくことがとても大事だと思っています。中高生の皆さんから「大阪公立大学があるからこの地域のことが好きだ」と言ってもらえるような大学であります。

「いいとこ取り」でより良い大学に

—私はボランティアに関することをお尋ねしたいと思います。私は中学校、高校とボランティア活動をしてきて、大学でも継続して行っています。私は大阪市立大学の学生ですが、ちょうど市大と府大の統合準備のタイミングだったということもあり、府大のボランティア団体の活動に参加することができました。大学統合によって、いろいろな地域にキャンパスを持つ大学になったので、学生がそれぞれの地域の方々と協力してボランティア活動を行うようになるとよいなと思っています。

大阪公立大学で学生のボランティア活動について何か計画されていることなどがあれば、教えていただけるでしょうか。

はい、ボランティア活動をされる皆さんに大学としてどのような支援を行おうとしているかについてご紹介します。杉本キャンパスでは大阪市立大学の頃からボランティア活動が盛んに行われていて、学生さんが個人やサークルなどで日常的に活動したり、東日本大震災のときに先生方や学生の皆さんが迅速に被災地の方々の支援にあたられたりしています。中百舌鳥キャンパスでは大阪府立大学の頃から続く「V-station」というボランティア・市民活動センターがあって、ボランティア活動をしたい学生と、学生の力を借りたい地域の皆さんをつなぐ場になっています。

私は常々「いいとこ取りをしましょう」と言っているのですが、それぞれの大学で行ってきた取り組みの「いいところ」をお互いに活かすことで、より良い大学にできると考えています。杉本キャンパスでは個人の熱意を感じられる活動がたくさん行われていますし、中百舌鳥キャンパスでは組織的に継続して取り組みを行うV-stationの体制が確立しています。ボランティア活動を行うにあたっては、社会の役に立ちたいという個人の熱意に加えて、地域の皆さんと一緒に物事を進めることが多いので継続性も大切だと思います。

2025年の大阪・関西万博では、V-stationが中心となって大阪公立大学の学生の皆さんをボランティアリーダーとして養成する計画もあります。どのキャンパスでもボランティア活動がさらに活性化してくよう、大阪公立大学として大学を挙げて支援していきますので、皆さんもぜひ参加してほしいと思います。



大阪公立大学で学生がどのように学び、どのように成長してほしいか

—大阪公立大学の強みや方向性など、たくさんお話しいただきました。最後に、そのような大阪公立大学における学生の学びや成長への期待について、お尋ねしたいと思います。



大阪公立大学で学生の皆さんがどのように学び、どのような人間として成長してほしいかについて、3つのことを期待しています。1つ目は「いつでも新しい学びに取り組める人」、2つ目は「多様な価値観の存在を認め合える人」、3つ目は「困難な課題にチャレンジしていく人」です。

どれも大切なことだと考えていますが、ここでは「いつでも新しい学びに取り組める人」について詳しくお話ししたいと思います。大学で学べることはたくさんありますが、社会に出てからも学ぶことはたくさんあります。社会に出て学ぶべきことが出てきた場合に、どのように学べばよいのかを知ることは重要です。大学ではなくさんのことを体験して、学びに関するいろいろな情報を自分の引き出しに入れてほしいと思います。その際、役に立つかどうかを今の段階で無理に考える必要はないと思います。学びの範囲を狭めてしまうことになりますし、今は役に立たないと思うことでも後から意外な価値に気づいたりするものです。

大学での学びに関しては、授業でご自身の専門分野のことを深めることも大事ですし、先ほどお話のあったボランティアや、クラブ・サークルなど正課外の活動を通して多様な人たちと関わって、柔軟な頭で物事を考えられるようになることも大事です。私も大学生の頃は、授業だけでなく、正課外で出会った多様な人たちから多くのことを学びました。私は人が集まってくれるところが好きで、そのようなところにはさまざまな楽しさがあって、学びもあると思っています。学生の皆さんには、総合大学である大阪公立大学の強みを活かして、いろいろなコミュニティに参加して多様な価値観を知り、困難だと思うこともチャレンジできる人になってほしいと思っています。

[インタビューはオンラインで行い、後日、対面での写真撮影を行いました。]

インタビュー参加者

学生：文学研究科後期博士課程3年生 有國明弘さん
法学部4年生 南出優季乃さん
文学部3年生 野坂咲花さん
法学部3年生 川村真琴さん
教員：高等教育研究開発センター 飯吉弘子
高等教育研究開発センター 橋本智也
教育学修支援室 外尾安由子

Voice ~学生の声~ 商学部と農学部の学生交流と座談会

商学部と農学部は、キャンパスが杉本と中百舌鳥に分かれています。今回の企画では、学びの共通点や相違点からお互いに学び自らの学びを振り返るために、2022年9月21日(水)に中百舌鳥キャンパスにおいて座談会を行いました。座談会に先立ち、中百舌鳥キャンパス農学部の飼育動物や昆虫標本などの見学会を行うとともに、商学部の学生によるプロジェクトゼミナール（オープンキャンパスでの学部紹介やワークショップ）の活動紹介や発表を行い、お互いの普段の授業や学びについて知る機会を設けました。

座談会には商学部の学生7名、農学部・農学研究科の学生8名（学部生4名、大学院生4名）が参加しました。高等教育研究開発センターからは飯吉弘子先生、深野政之先生、橋本智也先生に加わっていただきました。座談会の司会は商学部・農学研究科それぞれの学生が担当しました。

※大阪府立大学の生命環境科学域と生命環境科学研究科の学生も参加していますが、本記事では、大阪公立大学の学部・研究科名（農学部・農学研究科）で統一しています。

見学会や発表内容についての感想

【商:A】 先ほどの見学で説明してもらっているときに、虫や鳥がキーワードとしてよく出てきていたのが意外でした。これまで農学と聞いてイメージするのは野菜や果物やったんですが、生物も農学で扱う対象なんですね。皆さんお一人おひとりが研究対象に本気で取り組まれているのも印象的でした。これまで僕は虫に興味を持ったり、触れたりすることは、あまりなかったんですが、農学部では虫も研究対象だと知って驚きましたし、皆さんの研究への熱意はすごいなと思いました。

【農:B(修士1年)】 確かに、農学部で扱う範囲って皆さんが思っている以上に広くて、Aさんが言わされた生物の他に、土木や気象、植物の生育環境の調節、都市計画など様々なことを扱います。個人的な考えとしては、人間目線で自然と向き合うか、生き物目線で自然と向き合うかという観点から大きく二分できると思っています。

【農:C】 農学部の見学をしてもらっているときに、商学部の皆さんのが面白がっているのを見て、生物が豊かであることは人を笑顔にできることを再認識しましたし、生物の保全をしっかりしていく必要があると改めて思いました。



Voice ~学生の声 商学部と農学部の学生交流と座談会

【農:D(修士2年)】 商学部の皆さんのおーんキャンパス・プロジェクトの映像を見せてもらい、グループで1つのものを完成させるというのは素晴らしいことだと感じました。農学の分野では個人で活動することが多いので、新鮮で勉強になりました。

【農:E】 グループみんなで同じ目標に向かってプロジェクトを実現させたという発表でしたが、本当に大変なことですよね。オープンキャンパスという大学のイベントの企画を学生が中心になって一から考えているのもすごいと思いました。



学部・研究科を選んだ理由

商学部の学生の理由

【商:A】 商学部を選んだきっかけは、高校生のときに本学のオープンキャンパスに参加して、感銘を受けたことです。学生主体でオープンキャンパスを企画・運営していると聞いて、大学生ってこんなことができるんや、大学生ってすごいな、自分もそうなりたいなと思いました。それで商学部に入って、オープンキャンパス・プロジェクトに3年間参加しました。

【商:F】 商学部を志望した理由は、マーケティングが学びたかったからです。高校時代に文化祭でフランクフルトを3年間売ってたんですけど、フランクフルトをいつ何本仕入れて、どのタイミングに値下げしてというのを考えるのがすごく面白かったです。それで、オープンキャンパスに参加したときに、自分が面白いと思っていたことがマーケティングという分野だと知り、これを大学で学びたいなと思って、商学部に入りました。

【商:G】 私が商学部を選んだ理由は、起業に興味があったからです。私は北海道のすごく田舎の方の出身なんですけど、自分で何か事業を起こして、自分の育った町を少しでも活発にできたらいいな、そういったことを大学で学んでみたいなと思っていたんです。それで、マーケティングとか消費者行動という分野があることを知り、商学部に進学しました。

農学部・農学研究科の学生の理由

【農:H(修士1年)】 私が農学部を選んだのは、元々生き物が好きだったということもありますけど、明確なきっかけは「ダーウィンが来た!」というテレビ番組の中で、渡りチョウというアメリカからブラジルまで旅をするチョウの特集を見て、こんなに変わった生き物がいるんだと感動したことです。その時から、渡りチョウについて研究してみたいと思うようになりました。

【農:I】 私も小さい頃から生き物が好きで、大学で生き物について詳しく学びたいと思って、農学部を選びました。あと、フィールドワークが多いと聞いて、それも面白そうだなと思ったのも理由のひとつです。

【農:B】 僕も小さい頃から生き物が好きで、そのまま大きくなって今に至ります。(笑) 農学部に入って思ったことは、農学部は好きな生き物を研究して終わりではなくて、研究成果を用いて生き物をどう保全していくのかとか、どう駆除していくのかとか、もう一步踏み込んだところまで考えることが大事であり、そこが農学部で学ぶ魅力だなと思っています。

学部・研究科の学び、ゼミでの学び

【農:H】 商学部ではゼミの配属が2回生後期から始まるのですが、農学部と比べて入学してからゼミの配属までの期間が短いなと思いました。どうやってゼミを決めているんですか。

【商:J】 1年生の前期に経営学と経済学と会計学という3つの大事な分野を学びます。自分がどの分野に興味があるかによってもゼミ選びは分かれるかなと思います。あとは、実践的なゼミがいいなとか。私の場合は、人の働く

方にすごく興味があって、企業とレンタルオフィスの共同研究をやっているゼミを選びました。実践を通して、新しい働き方を学びたいと思っています。

【農:D】 私が所属している農学研究科の研究室のゼミでは、自分の研究の進捗報告や先行研究の論文の内容について解説することが主な活動なんですが、商学部のゼミではどのような活動をしているのでしょうか。

【商:F】 僕のゼミでは、座学というよりはグループワークを通じてマーケティングを学んでいて、ビジネスコンテストやコンペティションというプレゼンテーション大会みたいなところで発表をします。他には、自治体や企業から困っていることについて依頼を受けて、僕たちがフィールドワークに行って、最後は課題解決についてのプレゼンテーションをすることもあります。

【商:A】 僕は地域社会、地域経済のゼミに入っているんですが、関西の観光を盛り上げることがテーマのプレゼンコンテストにグループで参加して、取組を提案したことがあります。そのときに、和歌山県の当時の仁坂知事と意見交換をさせてもらう機会があって、僕らの提案について、その案はおもしろいが、こういった事情があるから難しい、みたいなリアルな意見を教えていただいたりしました。

【商:K】 オープンキャンパス・プロジェクトゼミの話なんですけど、メンバーは全部で57人いて、僕は2年生で学生リーダーという立場でした。メンバーのみんなの意見と自分の意見が違っている場合に、自分の意見を貫き通すのか、それともメンバーの意見を尊重して自分を抑えるのかをすごく考えました。そういうところは座学というよりプロジェクトで学んだことかなと思います。社会に出ても役に立つことを学べたと思いますし、実際にやってみてよかったです。

【商:A】 マーケティングの分野では、お客さんにどうやって商品を取ってもらうかという、お客さんへのプロセスを扱う一方で、地域をどうやって盛り上げるかということを研究してたりもするんで、商学部の学びは幅広いのかなと思います。理系の学び方はどういう感じなんですか。

【農:H】 理系では1年生から3年生の間に基礎的な知識を学びます。その3年間は、自分が何に一番興味があるのかを模索する時期になります。そして、4年生の1年間で研究手法について学びます。それら4年間で広く学んだ知識を基に、修士で研究テーマを一点に絞っていきます。

【農:B】 農学部の中でも僕たちの研究室はフィールドワークが多く、野外に出て自然と触れ合いながら研究できて、すごく楽しいです。一方で、思い通りの結果が得られなかったときに、それがヒューマンエラーなのか、自然の摂理なのかを判断するのがすごく難しかったりもします。自然を相手にするとどうしても不確定要素が多いので。

【商:A】 商学部では会社経営について、経営者・労働者それぞれの視点から見ることがあるんですが、それと似てる気がします。異なる目線で物事を見るというのはどの学問においても大事なのかもしれませんね。

理系は広い範囲で基礎的なことを学んだ上で、自分の興味があることについて範囲を絞っていくというお話をしたが、文系って、ちょっとずつ摘まみ食いをしながら面白そうなものを見つけて、それをゼミで深めていくイメージなのかなと思います。

【農:H】 ありがとうございます。確かに理系と文系で違いがありそうですね。



今後のキャリア、就職

【農:A】 将来のことについて、農学部生の方々がどういう進路に進まれるのかをお伺いできたらなと思います。将来、研究者としてやっていこうと思われているのか、それとも会社に就職しようと思われているのでしょうか。

【農:D】 農学研究科の修士の就職先は公務員が多いと思います。私の場

合は、研究で農薬を取り扱うため、最初は殺虫剤メーカーを検討しましたが、好きなことは仕事ではなく趣味のままにしようと思い、内定先は研究テーマとはあまり関係のないIT企業のSEになりました。(笑)他の人は公務員の中でも土木系が多く、企業だと造園系の人もいますね。何人かは博士に進学する人もいます。

【農:L(修士2年)】私は、高速道路の横の斜面、法面(のりめん)って言うんですけど、そこに在来種の木々を植えて緑化することを行っている施工管理の会社に就職する予定です。私はトンボとか、湿地関係のことを研究しているんですけど、正直それは仕事に直接役に立つか分からんですね。ただ、在来種を守りたいという気持ちはあるので、会社を選ぶときは、外来種ではなく在来種の木を植えて環境を守ることをしたいなと思って、その会社を選びました。

【農:B】商学部ではどのくらいの方が修士に進むのでしょうか。

【商:F】鈴木先生、何人くらいでしょうか。

【鈴木】今、235名の学部生がいて、修士に行く人は5、6名とすごく少ない。その辺は、理系と文系で違いますね。商学部の学部生の特徴として、就職がすごくいいんですよね。4年生で就職して企業で活躍している人がたくさんいます。

大学院に進学した人について、このオープンキャンパス・プロジェクトは10年以上前から続いているが、1回目のメンバーで博士までいって、和歌山大学の先生になって、今年の4月から大阪公立大学の商学部に戻ってきて先生をやっている人もいます。他にも、プロジェクトゼミのメンバーで、大学の先生になっている人が数名いますね。

【商:A】農学部だとどういう人が大学院に進学するんですか。

【農:B】理系はその分野で仕事をするなら、せめて修士まではいかないと通用しないと言われています。学部生で就職された方々は自分が好きなことと就職を切り離して考えておられる方が多いのではないかと思います。



一日を振り返っての感想

【商:J】飼育動物や昆虫標本などを見せてもらって、説明もたくさんもらって、すごく面白かったです。他の分野を知る機会があれば、自分の興味の幅が広がっていくんだなと思いました。

【農:D】起業などの将来を見据えて活動をしている方が多く、非常に面白かったですし、私自身の勉強になりました。それに、商学部の方々は話すのが非常に上手で、授業で学んだ実践の力が活かされているなあと感じました。

【農:H】私は理系で研究に従事する人にとって、自分の研究に対して様々な人に興味を持ってもらうことはとても重要だと思っています。せっかく研究で成果を出しても、誰にも注目されなかつたら価値が無くなるので。今日の座談会で、人々に研究への興味を持ってもらうための秘訣が商学部の研究にありそうな気がしました。

【商:M】今日、自分が商学部で何を学んでいるのかが改めてよく分かったというか。今まであまり意識してなかったけど、人とつながっていて、社会により近い学問なんだなとすごく実感しました。

【商:G】農学部の皆さんのお話を聞いて、自分の好きなことを突き詰められるのがすごいなと思いました。皆さん、大学に入ったきっかけについて、どの方も「好きだから」ということをおしゃっていたのが印象的でした。好きだからという気持ちを大切にして、大学に入ってもっと研究して、それを仕事にすることもできるということがすごく魅力的だと思います。

【商:J】そうですね。さっきEさんやHさんが「自分たちが学んでいることに興味を持ってくれたのがすごく嬉しい」ということを仰っていましたが、みなさんお一人おひとりがご自身の活動に熱意をもって一生懸命頑張っていらっしゃるから、私たちに伝わったんだなと思います。自分も見習っていきたいなと思います。

【農:B】今日、商学部の皆さんとお話をさせていただいたて、本当に社会に直結した考え方をされているなと思いました。農学部も社会に密接したことを探っていて、人間も含め自然をどう利用、保全していくかを探求する、これからを考える学問だと思うので、マーケティングが絡んでくると思いますし、すごく良い刺激を受けました。

【農:N】商学部と農学部について、意外と共通点があつて面白いなと思いました。さっきBさんがおしゃっていたように、僕ら農学部は、例えば絶滅危惧種だったり外来種だったり、自然で起こっている問題をいかに社会に伝えて、社会全体で取り組んでいくかが課題だと思うので、そこで商学部の方のマーケティング力をもとに協力して、2つの学部の学びが組み合わさることで、より大きなことができるのではないかと思います。

【農:C】農学部の学びと商学部の学びはあまり関係ないのでと思っていたましたが、意外と関わりが多いと感じました。例えば、農学部で学んでいる地域社会の資源循環やカーボンニュートラル、害獣駆除後のジビエ販売、田を守りながら生産したブランド米、工場での野菜生産もそうですけど、僕はそういう活動を環境の保全という面から見ていました。でも、それらは商売として成り立たないと続かないで、環境保全と商業をうまく絡めていく必要があることに気がつきました。

【商:F】マーケティングは組み合わせることが大事だと思っていて。例えば、マーケティングと林業や、マーケティングとフードロスなど、組み合わせて初めて役に立つものになると思います。そういう観点から言うと、今日、自分と全く異なる学問や立場の方々とお話しでき、自分の知見を広めることができて、とてもいい機会になったなと思います。

【商:O】農学部の皆さんのが仰っていた、正解がひとつではないというお話しや、いつも結果がうまく出るわけではないというお話しは商学部と同じだなと思って。マーケティングの分野でも、学んだことを社会でどのように実践するのか正解がなかったりしますが、それが理論と実践を学ぶことの面白さでもあるのかなと今日すごく感じました。

あと、さっきしさにトンボの見分け方を教えてもらったので、この秋はトンボを見ながら歩きたいと思います。(笑)

【商:A】今日のお話の中で、理系と文系の学びで違う部分がかなり見えたと思うんですけど、逆に共通点も見えてきたなと思っています。それが実践的というところやと思います。農学部はフィールドワークに出て、自分の体を動かして実践的に行われているなと思いました。商学部はオープンキャンパス・プロジェクトとか、ほんまに実践的な学びやと思っていて。農学部も商学部も地に足をつけた学びをする学部なんやなと思いました。今日は本当にありがとうございました。(拍手)



【飯吉】最後に、鈴木先生、平井先生からお願いできますか。

【鈴木】今日参加していただいた学生、院生の皆さん、本当にどうもお疲れさまでした。今回この企画を聞いて、面白いけどちゃんとみんな集まってうまく学生交流会が盛り上がるかなとちょっと心配なところもあったんですけど、私自身も今日本本当に勉強になりましたし、非常に面白い経験ができました。まだ今は夏休み中だし、各自いろいろ一番忙しい時期だったので、積極的に交流会をしていただきまして、本当にどうもありがとうございました。

【平井】今日はどうも皆さんありがとうございました。やはり商学部の皆さんお話しをお上手でしたが、意外にもうちの人たちもなかなか発言がよかつたなと思って、普段のゼミでもそういうふうにやってほしいと思いました。(笑)C君が結構いいことを言ってたなと思って。我々、生物多様性の保全という観点から研究をしているのですが、行き詰まるのは、人の行動を変えないと保全できないという点です。今日のお話を聞いていて、商学部さんのような発想をもっと入れていけば、うまく社会が回っていくんじゃないかなと思いました。



ウチの学部学域・研究科・機構では
こんな教育を行っています!

現代システム科学域・研究科

現代システム科学域教育福祉学類の 「ことおこしプロジェクト」

現代システム科学域教育福祉学類では「教育福祉フィールドワークII」(2年次前期)、「教育福祉フィールドワークIII」(2年次後期)が開講されています。例年、4~50名の学生が履修し、3名の教員がそれぞれのクラスを担当しています。

ソーシャルワーカーの養成においては、講義や実習に加えて、援助方法を体験的に習得する演習が欠かせないとされています。一般的に、そういう授業においては、ロールプレイや事例検討などを通じて、面接技法などの技術を習得することが目指されます。私も、今から20数年前、大阪府立大学に着任した当初はそういう授業をおこなっていました。しかし、やがて、ソーシャルワークの展開方法を身につけるには、シミュレーションではなく、よりリアルな状況において実際にソーシャルワークを展開することが重要なのではないかと考えるようになりました。また、学生が当事者性を自覚することも重要だと考えました。

そこで、学生たちが自らの学生生活に目を向け、生じている問題を発見し、それを解決するためのアクションを開発する授業を実施することを考えました。果たしてそういった案が他の教員に受け入れられるのかという不安はありました。幸いなことに、共感、協力してくれる同僚に恵まれ、従来型のオーソドックスな援助技術演習の部分を残したまま、新しい形の授業がスタートしました。“ソーシャルワークはことおこしだ”というある研究者の言葉から、学生たちが自らの手で問題を発見しアクションを開発する活動を「ことおこしプロジェクト」と呼ぶことにしました。現在、「教育福祉フィールドワークII」と「教育福祉フィールドワークIII」では、以上のような流れを受け継いで、「ことおこしプロジェクト」が展開されています。

学生たちはくじ引きで5~6名の小グループに分けられ、「ことおこしプロジェクト」を開発します。活動を報告するプレゼンテーションや報告書の作成も求められます。

約20年間で、おおむね200件くらいの「ことおこしプロジェクト」が多様なテーマで展開されてきました。たとえば、次のようなものがありました(以下、順不同)。ゼミ配属決定方法を改善するプロジェクト、貸し自転車のシステムを創り出すプロジェクト、生理用品が無償で配布されるようにするプロジェクト、学生が教員からレポートの添削を受

けることができるようにするプロジェクト、キャンパス内のバリアフリーを実現するプロジェクト、生協食堂の混雑を解消するプロジェクト、学生が学内の相談窓口につながりやすくするプロジェクト、下宿生の食生活や医療を改善するプロジェクト、キャンパス内通行の危険(自転車との衝突など)をなくすプロジェクト、キャンパス内の駐輪問題を解決するプロジェクト、教科書のリサイクルのシステムを創り出すプロジェクト、等々。

もちろん、プロジェクトはスムーズに進むわけではなく、思い通りにいかないこのほうが一般的です。問題を発見するには、さまざまな情報を総合的にとらえる力が必要です。調査一つをとっても、調査のデザイン、質問紙等の作成、実施に必要な関係者との交渉、結果の集計や分析など、さまざまなスキルを駆使してそれらの局面を乗り越えないといけません。また、解決に向けてアクションを計画するには、問題を取り巻く状況を深く分析して、可能な方法を探ることが必要です。さらに、アクションを実際に展開する際には、学内の教職員の方々、学生団体、また、プロジェクトによっては学外の団体(企業など)と協力関係を築く力やスキルが求められます。もちろん、以上のような活動をよりよく進めるためのチームワークも不可欠です。



「ことおこしプロジェクト」は、ソーシャルワーカー養成という観点から始まりましたが、社会福祉のみならず、教育をはじめ、さまざまな社会的実践の現場において求められる力やスキルを高めるための機会を提供している授業になっているのではないかと思います。

現代システム科学研究科 准教授 松田 博幸



ウチの学部学域・研究科・機構では
こんな教育を行っています!

商学部・経営学研究科

国際交流を通じて地方の活性化への貢献を目指す

商学部では2007年度からプロジェクト・ゼミナールを専門科目として立ち上げ、現実のビジネスが抱える課題を題材に、学生達が試行錯誤しながら自らの答えを生み出していくという学習機会を提供してきました。その一つとして、2018年度からタイのタマサート大学との共同プログラムを実施しています。これはそれぞれ中国、オーストラリアを訪問する別のクラスと同じく、プロジェクト・ゼミナールの目的に国際交流の要素を加えたものです。三つのクラスには共通して英語でのプレゼンテーション研修の時間が設定されており、学生は英語で自信を持って話すことでも学びます。



▲寄せ木細工でアクセサリーづくり



▲稲刈り

タマサート大学との共同プログラムの中心的な内容は当初次のようなものでした。まず、10月頃に商学部の学生がタマサート大学を訪問します。そこで、同大学からのプログラム参加学生と合流し、現地の日系企業を訪ねて、そこで働く方々に、タイと日本の違いで気づいたことや、現地での働き方などについての聞き取り調査します。その調査に基づき、学生達が話し合って「日本とタイの文化を踏まえたキャリアパス」についての考え方をまとめ、その内容を調査に協力してもらった方々相手にプレゼンするのです。また1月にはタマサート大学の学生が訪日し、商学部の学生と一緒に日本の企業を訪問します。このように両大学の学生は実際に相手国を訪問し、交流をしていました。

新型コロナの流行で海外渡航が制限されるようになり、今のところまだ訪問を伴う交流の再開はできません。しかし両大学の学生はビデオ通話を使って交流を継続しています。2021年度には商学部が鳥取県日南町と協定を結び、インターンシップを受け入れてもらえることになったため、これをプロジェクト・ゼミナールのプログラムに組み込み

ました。受け入れ先になったのは農業組合法人工ファームHOSOYA、寄せ木細工アクセサリーづくりの白谷工房、林業従事者を育成するにちなん中国山地林業アカデミーです。商学部の学生はそれぞれの現場で実際の作業を体験する中で、地域が抱える課題について思いを巡らせました。

この体験をオンラインの交流でタマサート大学の学生に伝えるのです。タマサート大学からはこのプログラムに、観光、報道を専攻する学生や日本語を学ぶ学生が参加していました。ちょうどタイで日本の地方に対する注目が高まっているようで、彼らにとっても興味を引く内容だったようです。彼らは商学部の学生と一緒にになって、日南町と米

子の地域活性化策を提案するため、知恵を絞ることになりました。出てきたアイデアは、プログラムに協力いただいた日南町とインターンシップ受け入れ先の方々に聞いてもらいます。



▲林業体験



▲伐採した木でキャンプファイア

マンガ・パンフレットの作成、SDGs×ファッションを前面に出したマーケティング、スマート農業に焦点を当てた技能実習。学生達は学んだこと、話し合ったことを懸命に伝えようしていました。

学生達の提案がすぐに大きな成果につながることはないかもしれません。しかし、自分たちの知らない日常と、人々の具体的な営みに対する関心の種が蒔かれることで、彼らの学習はより実りあるものになることでしょう。

取材協力：商学部・経営学研究科 准教授 圓丸 哲麻
文責：商学部・経営学研究科 教授 神野 光指郎



ウチの学部学域・研究科・機関では
こんな教育を行っています!

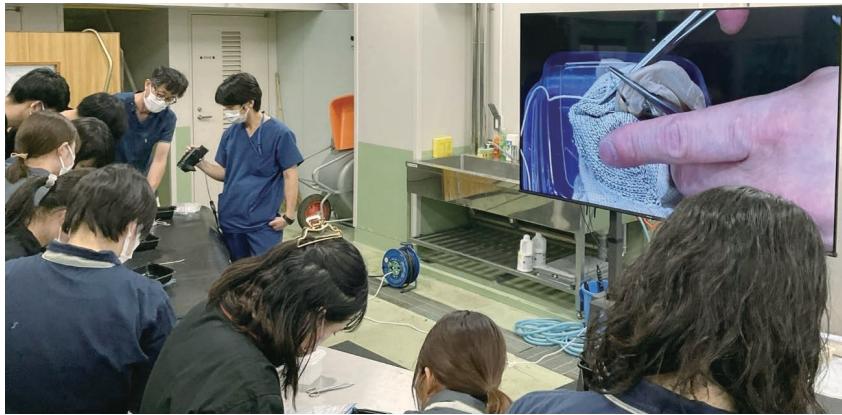
獣医学部・研究科

国際水準の獣医学教育を目指し大きく変わるカリキュラム

新大学発足に合わせて、2022年度入学生より新カリキュラムがスタートした。今回、伴侣動物、産業動物、公衆衛生系、病理系、の4つの観点から新カリキュラムを紹介する。

●伴侣動物

新カリキュラムでは、獣医学共用試験に合格した学生が student doctorとして、実際の動物の診療に直接携わる参加型臨床実習の時間が現行カリキュラムに比べて大幅に増加する。国際水準の獣医学教育の基準を満たすために、附属獣医臨床センターにおける症例数の確保や、外部機関ならびに民間動物病院との連携による学外での学生実習の環境整備について、取り組みを続ける。また、2022年10月より夜間救急診療を開始し、救急医療に関する学生の教育環境も整いつつある。さらに、採血や縫合など基本的な技術の習得ができる各種シミュレーターを設置したスキルラボの充実、バイオセキュリティを考慮した施設の改裝などを進めていく予定である。学生が卒業後すぐに臨床現場で獣医師として勤務ができる技術（いわゆるday-1 skills）が習得可能となる教育環境の構築を目指す。



▲シミュレーターを使用した実習の様子

●産業動物

3段階で産業動物獣医臨床教育を実施する。まず、共用試験受験前までに「プレクリニカル実習」を実施する。牛、馬、豚、鶏などの様々な産業動物のハンドリングを学ぶことからスタートし、臨床現場で必要な基本技術を学ぶ実習動物やシミュレーターを使用した実習までを行う。写真は、シミュレーターを使用した実習風景を撮影したもので、カメラを用いて手元を大きく映す工夫を行っている。続いて、共用試験合格後に「学内でのポリクリ実習」を実施する。学外で行う参加型臨床実習に必要な思考力を、提携施設や提携牧場における模擬診療・検診等を介して育む。最後に「学外でのポリクリ実習」を実施する。牛、馬、豚を対象とした一次

診療を実施する診療所での診療や往診に参加する。獣医師のリアルライフを体験し、これまでに習得した技術を臨床現場において実践する。これらを通して、近隣での産業動物飼養頭数の少ない本学において、国際水準に準拠した産業動物獣医臨床教育を目指す。

●公衆衛生系

国際水準の獣医学教育が掲げるDay One Competenceの中で特に「動物の健康と福祉や獣医公衆衛生の向上に向けたワンヘルスの概念の発展に貢献するための専門能力の活用」や「動物由来食品の品質と安全性管理を念頭に入れた畜産動物の適切な死後検査の実施と食品検査の実施」の達成に向けてカリキュラムの改編を行った。基礎知識と基盤技術習得のための講義と実習を3年生までに修了し、4年生以降は現場での各種検査や管理、対策指導に参加する体験型臨床実習を課す。その具体的な内容として、地方自治体における各種公務員獣医職務（屠場食肉衛生検査、動物愛護・保護管理対策、家畜衛生管理、保健所食品衛生検査など）の実施、学内における動物由来食品の製造加工を通じた食品安全管理手法の学修が挙げられる。実務に則った教育を通して、今まで以上に公共獣医師である獣医職公務員の職務と職責への理解ならびに現場で求められる実践力と対応力の強化が期待される。

●病理系

新カリキュラムでは、国際水準の獣医学教育を実践するために、学部生が実習で経験する動物の病理解剖（剖検）の件数を大きく増やす必要がある。病理解剖の実習では、学生は肉眼検査を通じて動物の病気の診断法や病気の成り立ちを学び、獣医師に必要な基礎知識を蓄積していく。4年次に開講する臨床実習では、犬、猫、牛、豚、馬、ウサギ、鳥などの多種多様な症例を年間130件以上集めることを目指しており、現在、少しづつ症例を増やしている。また、りんくうキャンパスでは新しい病理解剖棟が現在建設中で、2023年度には運用可能となり、病理解剖実習が更に充実し、獣医学生の理解向上につながることが期待される。

獣医学研究科 獣医学部 教授 東 泰孝
准教授 安木 真世
准教授 古家 優
准教授 井澤 武史
准教授 古山 敬祐



ウチの学部学域・研究科・機構では
こんな教育を行っています!

国際基幹教育機構

基幹教育科目を提供する他、学生の皆さんのがんばりを充実させる各種学修支援等を実施しています

国際基幹教育機構が提供している科目

大阪公立大学には多くの学部・学域があり、学生の皆さんにはそれに、多様な学習成果を身につけていくわけですが、それらの多様な学習成果の「基幹」を形成する役割を担っているのが「総合教養科目」「初年次教育科目」「情報リテラシー科目」「外国語科目」「特例科目（日本語）」「健康・スポーツ科学科目」「基礎教育科目」から成る基幹教育科目です。国際基幹教育機構は全学の数多くの部局とも協同しながら、これらの科目を提供するとともに、学生の皆さんの学びがより充実したものになるように、様々な学習支援も行っています。また、副専攻科目や資格科目も提供しています。

学部・学域横断で多様な学生同士で学びあう 「初年次ゼミナール」

今回のCampus Inquiryでは、上記の基幹教育科目のうち、初年次教育科目として開講されている「初年次ゼミナール」を紹介します。初年次ゼミナールは1クラス15-17人程度の少人数クラスで、学生同士が議論をしながら、調査や制作、実験等を行い、レポートなどで成果発表を行う授業です。各クラスには、様々な学部・学域に所属する学生が配属されるので、いろんな世界観やアイデアを持った学生同士の交流があります。多様な専門分野を背景とする、本学の全部局の教員が授業を行うので、豊富な種類のゼミナールが開講されているのも魅力です。杉本・中百舌鳥の両キャンパスで、それぞれ100クラス程度ずつ開講される中から、興味関心に応じて学生が選択します（抽選あり）。「国際基幹教育機構開設科目要覧」には、初年次ゼミナールを履修した先輩たちが、後輩のために書いてくれた「科目選択に当たってのアドバイス」も掲載されています。

初年次ゼミナール
「機能性食品について調べてその意義を考える」
(令和4年度開講) (担当:増田俊哉先生)

機能性食品についての問題点や疑問点を出し合い、5つのグループに分かれて調査研究をしました。文献調査だけではなく、アンケートフォームを使ってアンケート調査をしたり、町に出かけての聞き取り調査をしたグループも。調査結果を分析して、報告書にもまとめました！



初年次ゼミナール
「大学発!! オリジナルレシピを作ろう!!」
(令和4年度開講)
(担当:安井洋子先生)

デパートの地下食料品売り場に陳列するレシピを作りました。レシピを作るには、食材のこと、栄養価のこと、予算のこと、時間のこと、盛り付けのこと、検討事項がたくさんあり、多角的・総合的思考力が試されます。

学びをもっと充実させるために

大学教育は単位制度に従って運営されていますが、「単位」には授業時間と授業時間外学習時間の両方が含まれます。学内には、学生の皆さんの授業時間以外の学びを充実させるための資源が豊富にあります。基幹教育科目と比較的関わりの深いものとして、中百舌鳥キャンパスのSEL室（理数基礎e-Learning室）を紹介します（下写真）。

SEL室は、基礎教育科目（物理・化学・生物・地学・数学）の自主学習サポートを目的に開設されました。中百舌鳥キャンパスのB3棟213室にあり、PCを活用した自習用のe-Learning教材やDVD教材、およびインターネットを使用できる環境があります。高校段階の基本的な教材から、大学レベルの教材までありますので、高校の理科・数学の復習をしたい人（理科の科目などを高校で履修していなかった人を含む）から、より高度な教材で勉強したいと思っている人まで、幅広く利用していただけます。



他にも、数学学習の相談ができるところ（中百舌鳥キャンパスB3棟216室の数学相談室や杉本キャンパスOMUラーニングセンターの数学学修相談）や、英語学修のサポート（e-Learning, English Café, 英語学修支援）もあります。さらに、対面やオンラインで学修支援イベントが開催されたり、各種の教材（アカデミックライティング入門、学びのTipsなど）が、基幹教育科目を学ぶことの多い1-2年生が多く集まる場所に配架されています。

国際基幹教育機構 高等教育研究開発センター 教授 西垣順子

OMU Education & FD News

OMU ラーニングセンターで学修支援を行っています！

大阪公立大学では、入学から卒業までの「学修成果の質保証」の取組の一環として学生の自主的・能動的な学修とそれを促す教育を支援するために、OMU ラーニングセンター（教育学修支援室学修支援部門、以下 LC）を開設しています。LC では、特任教員および「SA・TA*1」という教育支援を行う学生の専属スタッフが学修支援、教材開発、イベント・セミナーなどを通して、みんなの学修支援を行っています。杉本キャンパス（全学共通教育棟 1F）での対面実施に加え、オンラインでも各種支援を受け付けています。自宅や他キャンパスからの利用も可能です。

一般学修相談

LC 特任教員などの専属スタッフがレポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションの方法、大学での一般的な学修の相談などについて対応（スタッフによるレポートなどの添削は行いません）。また、学びの振り返りや学修計画の立案を支援。



英語学修支援

国際基幹教育機構の英語担当の先生方がサポート。自主学修支援では、先生と相談しながら自習メニューを作成し、継続的なアドバイスをもらいます。また、ライティングの支援では、毎月のライティング課題の添削指導を受けながら、ネイティブの先生から弱点克服のためのアドバイスをもらいます。



数学学修相談

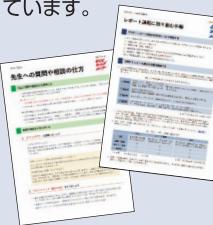
杉本キャンパスの数学研究所の特別研究員がサポート。数学の自主学修の相談、授業の内容の確認、定期試験対策、つまずいているポイントと一緒に探し、解決方法を相談することができます。ホワイトボードなどを使って式を書きながら親切に丁寧に解説してもらいます。



セミナー・イベント 自主学修教材

「学びの Tips」

レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、質問の仕方など、自学自習や大学生活で役立つ情報・ポイントをテーマごとにまとめた教材です。数学の深い理解を促す数学編もあります。現在、40種類以上を Moodle で公開しています。



自習スペース

杉本キャンパスの全学共通教育棟に自習できる場所を提供しています。一人でも複数人でも自習ができます。授業の準備、グループディスカッション・グループワークにもぜひ利用してください。学修に関して、専属の特任教員などに気軽に相談や質問などをすることができます。



*1 SA・TAとは、それぞれスチューデントアシスタント（学部学生）、ティーチングアシスタント（大学院生）の略称です。どちらも本学の授業や教育活動をサポートすることが役割です。

高等教育研究開発センターが実施する全学 FD の推進・支援をご紹介します！

高等教育研究開発センターの活動のひとつに全学 FD の推進・支援があります。学生や教員の特性と状況・ニーズに合った教育改善や多様な FD 活動の全学的な推進と支援を行っています。ここではセンターが 2022 年度に実施した全学 FD の推進・支援活動の一部をご紹介します。また、部局ごとに教育改善や FD に関する取り組みが活発に行われています。具体的な活動は「Campus Inquiry」（本誌 6～9 ページ）をご覧ください。

(1) FD 研究会

大阪公立大学における教育改善・FD の取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定しています。大阪市立大学で第 19 回まで実施した FD 研究会を引き継ぎ、大阪公立大学としての第 1 回 FD 研究会を 11 月 4 日（金）に実施しました。全体テーマは「大阪公立大学における FD のあり方について考える（1）」でした。



(2) 教育改革フォーラム

大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開催しています。大阪市立大学で第 29 回まで実施した教育改革シンポジウムを引き継ぎ、大阪公立大学としての第 1 回教育改革フォーラムを 10 月 12 日（水）に実施しました。全体テーマは「あらためて Faculty Development について考える」とし、松下佳代先生（京都大学大学院）から「FD の難しさと面白さ—コロナ禍を経て考える—」と題してご講演いただきました。



(3) 内部質保証スタートアップ支援事業成果報告会

大阪府立大学で進めてきた「内部質保証スタートアップ支援事業」の成果を全学で共有するとともに、大阪公立大学の内部質保証システムの充実に向けて示唆を得ることを目的として、報告会を 7 月 4 日（月）に開催しました。

(4) 新任教員 FD 研修

2022 年度新規採用教員向けに新任教員 FD 研修を実施しました。4 月 4 日（月）に行った Zoom による同期型（リアルタイム）の研修と、動画による非同期型（オンデマンド）の研修を組み合わせて実施しました。

(5) 授業デザイン研修 I・II

テニア・トラック助教および授業経験の浅い若手教員を対象とした研修で、大阪府立大学で行ってきた研修を大阪公立大学でも実施しています。「授業デザイン研修 I」は 1 回の授業を設計・実施する際の基礎を身につけてもらうことを目的として、12 月 9 日（金）に実施しました。「授業デザイン研修 II」は授業科目（半期 15 回）を設計する際の基礎を身につけてもらうことを目的として、1 月 13 日（金）に実施しました。

(6) 大学教育研究セミナー

大阪市立大学で第 28 回まで実施した同セミナーを引き継いで、大阪公立大学としての第 1 回大学教育研究セミナーを 12 月 9 日（金）に実施しました。全体テーマは「学修成果の可視化について考える：OCU 指標の振り返りを中心に」でした。大阪市立大学で開発し活用していた OCU 指標をテーマとし、考え方や活用方法等をあらためて知るとともに、大阪公立大学における学修成果評価方法のあり方や学修成果可視化ツールを考える機会としていただきました。

高等教育研究開発センターの HP で上記を含む各種催しの動画や資料をご覧いただけます（学内限定で公開）。

<https://www.omu.ac.jp/las/highedu/fdevent/report2022/index.html>

大阪公立大学の教育広報誌『大学教育だより』と基幹教育科目ガイドブック『アンロソ』をそれぞれ創刊号として発行しました。『大学教育だより』は大阪市立大学教育研究センター発行の同名の冊子（2004～2021 年度、最終号は第 19 号）と、大阪府立大学高等教育開発センター発行のセンターニュース『フォーラム』（2005～2021 年度、最終号は第 45 号）の両誌を引

き継いたもので、本学の教育を学内外に広く発信することを目的としています。『アンロソ』は大阪市立大学大学教育研究センター発行の同名の冊子（1999～2021 年度、最終号は第 23 号）を引き継いたもので、基幹教育の意義や学ぶことのおもしろさ等について、文系・理系の先生方に語っていただいている。両誌が学生の皆さんのがんばり道のしるべになれば嬉しい思います。（橋本）

編集
後記

各サポートの情報、学びの Tips やラジオ動画などの DL はこちらから

